朝鮮美術展によせて(1)

韓国絵画断想

韓国・弘益大学校教授 安輝濟（アン フィー ジュン）

先史時代の線刻画を論外とすれば、墨と彩色と筆とを使用して描く真正な意味での絵画が韓国で発展し始めたのは、おそくとも4世紀頃の三国時代からであるとみることができる。したがって、韓国の絵は今まで約1600年以上の長い歴史が続いていることになる。

このような長い歴史を継続しながら韓国の絵画は中国等外来の影響を受容し独自な画風を形成し、ときには日本絵画の発展に刺戟を与えたこともあった。したがって韓国の絵画は国際的普遍性と韓国的特殊性とを兼備しているとみることができる。

韓国の歴史上、実用画のみならず純粋な鑑賞のための絵画が最も発達したのは朝鮮王朝時代（1392～1910）である。この時代には王公士大夫と画員たちが絵画の発達に大きく寄与した。しかし、高麗時代まで重要な位置を占めた画僧らの役割は抑仏崇儒政策のせいで大きく、衰退するようになった。

朝鮮王朝時代の絵画は画風の変遷によって大体に初期（1392～約1550），中期（約1550～約1700），後期（約1700～約1850），末期（約1850～1910）の4期に分けることができるが、各期ごとに別の様相を表わして発展した。

ところで朝鮮王朝時代を含む韓国の絵画に関しては過去にあまり研究が進んでおらず、したがってそれに対する理解も充分ではなかったことは事実である。このような実情は1970年代に入ってから、亜洲大学校総長の李東洲博士や国立中央博物館館長の崔淳雨博士を始めとし、元老学者や少壮学者たちによる研究結果が刊行されるようになって、改善され始めた。

外国においても日本を始め、しだいに韓国の絵画を新しい目で見直し、蒐集し研究しょうとする傾向がじょじょに興っていて、たいへん幸いである。日本においては大和文華館が積極的な活動を行っている。

このような韓国の絵画に対する関心が次第に高まってはいるが、しかし過去の日本人が漠然と持っていたある偏見が充分に払拭されたとみることはむずかしい。このような偏見が生まれたのには二つの考えが作用していると思われる。すなわち、その一つは韓国の絵画は中国の影響を強く受けたので、別の韓国的特色が育てられなかったのではないかという漠然とした考えであり、もう一つは韓国絵画はあまりに粗い筆癖をもっているので、日本人の美感には合わないという見解である。韓国絵画を正しく理解するためには二つの考えを検討してみる必要があると思われる。

まず韓国絵画と中国絵画の関係を見てみることにしよう。韓国の絵画が過去の中国の絵画から大きく影響を受け、またそのような影響が韓国絵画の発達に大きな役割を果したのはまちがいない事実である。この点は、ただ韓国のみならず日本を始め其他中国の周辺国家の場合にも例外でない。過去の中国の絵画は東亜において今日のパリやニューヨークの絵画のように一種の国際美術の性格をおびていたのを考え合わせると、それの受容は非常に当然なことといえる。加えて、このような中国絵画の受容過程においては受容する側の積極的努力とそれなりの美意識が大きく作用したことを認識する必要があろう。すなわち韓国や日本の画家たちは自分なりの嗜好や美感に合う画風を積極的、かつ選別的に受容したのである。しかし、なによりも重要なことは韓国や日本の画家たちは、中国絵画の影響を受容して各自、自分なりの独特な画風を形成したのは事実である。このような理由で韓国や日本の伝統絵画には外来的な要素がみせてくれる国際的普遍性と独自的に発展された特殊性がともに窺える場合が多い。したがって、この二つの要素の中で一つだけを針小棒大してみるのは大きなあやまりであろう。このような文化的複合性は東西古今をとわず発達した文化ではいつも見られる現象であるからだ。

それでは、日本人がなぜ韓国絵画を好まないかという問題を考えてみよう。たしかに韓国人と日本人は文化的に差異点を多くもっている。絵画に関しても同様である。私の考えでは日本人は多く均勢のとれた瀟洒な絵を好むと思われる。このような絵に馴れている日本人の目には多少粗い感じの韓国絵画をみる時には、筆癖があまり強く感じられるのではないかと推察される。とくに朝鮮時代の絵画に対してはもっとそのように見るようである。

朝鮮時代の絵画はこの時代の韓国人の嗜好や美意識を反映したもので、それがもっている特性は同時代の陶磁器や其他の工芸品がみせる性格と基本的には変わらない。そうだとすれば、なぜ日本人は朝鮮の陶磁はそれほど愛しながら、同じ時代の同じ人々によって作られた絵画は好まないのだろうか。これは多分朝鮮の陶磁器は日本人の茶礼と不可分な関係のもとに愛護されたことに比べてその時代の絵画は正しく紹介されなかったことに最も大きな理由があるのではないかと考えられる。したがって韓国の絵画も正しく紹介さえされれば陶磁器の場合とは比較にならないほど日本人に愛護されるのではないだろうか。

（訳　大阪大学大学院生　金　貞教氏）

瀟橋尋梅図（部分）李朝　当館蔵

花鳥図（部分）李朝　当館蔵

安輝濟氏
1940年ソール市に生まれる。ソール大学校卒業。ハーバード大学大学院美術史専攻修了。哲学博士。著書『韓国絵画史』

季刊 美のたより No.59
昭和57年5月27日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.